



二月二日[㊦]

Tinderでマッチした人から「日記を交換しませんか」と提案されて日記を交換していた時期がある。知らない人の日常、仕事がだるいとかどんな料理をしたとか、趣味や友人からいわれたことなど、そういうだれかに読まれるはずのなかった日々を読みあうのがたのしかった。人と会話を続けるのは疲れるけれど、自分のことを好き勝手に書いてる分には楽し、相手も好きに書いてるのがうれしかった。相手の根回のメンタリティを見てると、自分がいかに根暗でマイナス思考か思い知らされ、そんなに思い悩まなくてもいいのかも、勝手に自分で気づいたりもした。その人とはもう日記を交換しなくなってしまうけれど、そのことを思い出してTinderで日記を交換する人を探すことにした。

二月三日[㊦]

古本屋から出ると、シャウエッセンの匂いがした。いやシャウエッセンの匂いってなんだよと思いつながら、信号待ちをしていると「お姉さんはまだ早いですか？」と声をかけられる。マンション売りのお兄さんだ。「まだ早いですね」と答える。

「大学生？」「さすがにそこまで若くはない」「結婚はされてますか？」「そんな予定も

ないですね」「っていうかもう疲れちゃったおれ」と突然いい出すので思わず笑ってしまった。年齢を聞かれて、こちらでも聞き返すと21だと答える彼。若い。

そこから、マンションの営業なのか、ナンパなのか、というかただの暇つぶしなのかよくわからないけど、彼氏の有無や仕事、いま何しているのか矢継ぎ早に尋ねてくる。わたしはこういう訳のわからないことに巻き込まれるのは嫌いじゃないから、もう少し付き合っていたけど、映画の時間が迫っていたので切り上げてその場を去る。「ありがとう、たのしかったよ、バイバイ」というと「急に子ども扱いして」といいながら、拗ねるみたいにして手を振っていた。

『フレンチ・ディスプレイ』は最高だった。洒落ている。画面いっぱいまで完璧に構成された画づくり。気の抜けた筋書き。遊びの効いた演出。すべてが完璧にコントロール下にある。あまりに完璧すぎて疲れた。いつまで経ってもウエス・アンダーソンの映画を観てるときにするんだろうな。帰りにスーパーに寄ったけど、シャウエッセンはやっぱり特売のときに買うことにする。

二月四日[㊦]

歯列矯正をはじめて半年が経つ。数日前、調整にいったのだけど、複数の口内炎がで





きた。器具が口内にあたって炎症を起こすのだ。治っては、違うところに行けるを繰り返し、もううんざりしている。話は変わって、年末に尖圭コンジローマという性病にイボができる性病にかかった。ペルセナクリームという軟膏で治療している。なかなかこいつが厄介で、刺激が強いクリームだからイボ以外に塗ってはいけないし、朝は洗い流さなければならぬ。そんなこんなで、最近はお風呂上がりに、口内炎の軟膏を塗って、鏡を覗き込みながら股にクリームを塗るという日々がしばらく続いている。上の口も下の口もトラブってるなんて、なかなか笑えるなと思ったけれど、あまりに下品でTwitterには書けない。

下品ついでに、今日「空階階段の踊り場」を聴きながら仕事をしていた。ギンダチポナーのコーナー、中高生たちの勃起に関するエピソードで思い出したことがある。高校生ぐらいのとき、「勃起」現象と「挿入」という行為はわかっていたけど、勃起するから挿入できるようになるというのがよくわかっていなかった。意味がわかったとき「なるほど！」と感動した。なんてかわいらしい時期なんだろう。あのころは処女のままだぬんだろなああと思ってた。大丈夫、あんた無事に性病ももろてんで。こないだ「OVER THE SUN」の過去回を聴いていて、わたしいくつまでセックスするんだろうなと思っただ。

二月五日㊥

六本木のタカ・イシイギャラリーへ、ロニ・ホーンの写真展を観に行く。こないだ箱根のポーラ美術館でのロニ・ホーン展にもいった。ロニ・ホーンは日常のなかの美しさを写真作品にしたと語る。たしかポーラ美術館の展示のなかで、視点を変えれば日常にも美しさは溢れているし、それが人の心を豊かにするだろう、といった趣旨のことが書かれていたと思う(記憶違いかもしれない)。だとしたら美術館やギャラリーにこそいそと通う自分ってなんなんだろうと思っただけどわたしはだれかの美意識によってつくられた美しさが好きだし、そういう作品を観たい。だからこうやって作品に出会い続けているのだと思う。

日比谷線に乗って、恵比寿のなどやというギャラリーに向かう。ここは古民家を改装したギャラリーで、デザイナーの実験的な作品を展示することが多い。わたしはアートよりもデザインに関心があるので、とても好きなギャラリーだ。といっても今日が三回目の訪問、しかも大家さんの事情により来月末には解体されてしまう。代々木上原にも系列のギャラリーがあるので、活動はそちらへ引き継がれるそうだ。

などやでは、テキストスタイルデザイナーが展示をしていた。それは解体清祓という建物を取り壊す際に行う儀式がモチーフとなった作品だった。建物を建てたこともなけ





れば、取り壊したこともないのでそんな行事は知らなかった。こういうところに教養が出るので恥ずかしい。展示作家と話すのはたのしみでもあるが、自分の審美眼と経験と知性を試されている気がするので、とても緊張するし、ストレスでもある。単に自意識過剰なだけだけど。でも自分がなを感じたかは伝えるように努めている。作品に出会ってしまった限りはそれが役目だと思っているから。なにに責任を背負っているのかわからないけど、それは果たさなければいけないと思っっている。でも今日はうまくできなかったな。まあそんな気負わず気楽にいつて帰ってくればいい。

二月六日㊸

九時半起床。コーヒーを飲みながら、佐久間PのYouTubeチャンネル「佐久間宣行のNOBROCK TV」のシソンの100回ボケてツッコむタイムレースを観る。じろうさんの憑依芸がすばらしかった。ひとしきり笑ったあと、豚汁を三回分ほど一気に仕込む。一回分を火にかけ、残りの具材は冷凍した。こうしておけば十分で豚汁ができる。やる気がない日のためのお守りだ。大量の野菜を刻むのは一瞬の瞑想状態：といたいだが、わたしは料理があまり好きではない。狭いキッチンでまな板から落ちていく野菜がストレスだし。今日も三十分以上野菜を刻んでいたし、ちよつとした工程

の積み重ねで調理全体の時間がかかりすぎる。もし一日が三十時間だったら好きだったかもしれない。料理に創造性を見出す感性が豊かな人を見ると羨ましく思う。

二月七日㊹

仕事で所沢まできたので、ところざわサクラタウンの角川武蔵野ミュージアムにいく。隈研吾氏が手がけた建築が目当てだ。石でできたそれは予想以上に迫力がある。けれどそれほど強くは関心が持てない。内部と外部が切り離された目の前の物体とどう向き合えばいいのかわからない。ミュージアム横にある商業施設のほうは、バタバタと多面に屈折したパネルに覆われていてかなり鬱陶しく感じる。V&Aダンディのような隈研吾氏の建築が見たい。これは隈研吾の問題ではなく施主の問題でもあるだろう。用途は違うので単純に比較はできないけれど。いつか好きだった男の子と見にいこうと話していたけどこなくてよかった。わたしは興味がないとそれが露骨に態度に出してしまう。図書館の荒俣宏コーナーにあった高野文子の『おともだち』と『黄色い本』を流し読みして、施設を出る。

ところざわサクラタウンの近くに、天然温泉のスパ銭湯があったので帰りに寄る。まん防で20時までしか食事を提供していないので、まずざつと湯に浸かってすぐに





て食堂に向かう。とんこつラーメンを頼んだら、いまだき見ないほどに牛乳でも入っているのかのような白いスープ。まずくもないけどうまくもないこういうラーメンをときどき食べたくなる。食べ終わってもう一度浴場へ。

ひとしきり湯に浸かったあとサウナに入る。テレビでは「COUNT DOWN TV」のスペシャル番組が流れている。おばちゃんの方が「みんなおんなじ顔に見えるし、みんなおんなじ曲に聞こえる」といった。わたしもいま同じこと考えてた。いま流行っている曲がほんとうにわからない。白い服を着たアイドルと思われる男性たちが昔流行った曲をカバーしている。あーカラオケいきたいな。もう丸二年いってない。サウナを出ても、スーパー銭湯なのにアルコールの提供がされていない。ビールのない銭湯なんて。

二月八日④

ずっとたのしみにしていたことがある。火鍋だ。そんなつもりはないのだが、どうやらわたしは収支のあわない生活をしているらしい。そんなわたしに唯一削れることといえば食費くらい。家の中でなるべく時間や手間をかけずに、楽なおいしいものが食べたい。こないだ一人コンロの前でスタンディングしゃぶしゃぶをしながら「この

要領で火鍋ができないだろうか」と思い立った。いろいろ調べてみると、高円寺駅前に中国系の商店があり、そこでは中国国内で流通している火鍋の素が安く手に入りそうだ。中古のブランド品を扱う店が入った雑居ビルの何階かにその店があった。「ニーハオ」といわれて、かなりきこちなく「ニーハオ」と返しながら、店に入ると五歳くらいの女の子とその子をあやす母親と思われる女性。中国語の親子の会話を聞きつつ店内を物色。そこにあつた、いちばん安い火鍋の素を買った。

そしてきたる今日という日は一人火鍋。在宅勤務なので、昼からやる。台所で放置されたニンニクを大量に放り込み、買ったばかりの新鮮なしょうがをざくざくと切っつけていれる。きのこははじめから入れたほうがいいというアドバイスがネットにあつたので、えのきとまいたけを投入。牡蠣とイペリコ豚肉を脇にかまえて、火をかける。固形のスープが溶け出し、真っ赤な水面がぼこぼこ揺れる。そろそろいいかなと思っただけでまずイペリコ豚から食べる。もちろん台所のキッチンの前にスタンディングしたまま。これはかなりうまいぞ。はふはふと牡蠣をくわえれば、旨みと辛みがじゅわと広がっていく。無心になって箸を進めていたけど、そのうち辛さに耐えられなくなってきた。ネットで調べると、ごま油と塩でタレをつくとよいとあるので、さっそく実践。うま。あーしあわせ、ていうかビール飲みた。そして昼休憩を終えて業務に戻る。





午後、社内の打ち合わせ。仕事の話は早々に今後のキャリアの話からしいたけ占いの話題で盛り上がった。一人悶々するだけではなく、たまにはだれかと腐りあうのも発見がある。終業後も火鍋。もちろんここではビール。

二月九日㊦

明日は大雪らしい。明日は前に「inder」で知り合った男性と会う約束をしている。パレンタインも近いし、チョココでも用意すべきか否かひととおり悩んだ末に用意した。一個三百円のTopsのチョコレートブラウニー。かなり妥当だと思う。妥当な手土産選手権があったら、わたしはけっこういい線いける自信がある。まあ会えなかつたら会えないで仕方がないな。彼に「雪合戦しよー」と送ったら「いえーい」と返ってきた。やるのかよ。ブーツ売らなきゃよかった。コンバースのハイカットで戦えるかな。

二月十日㊧

雨が雪に変わりはじめたところから、雪の状況を調べつつ、電車が動いていれば問題ないだろうと樂觀していた。電車は止まる気配もないし、雪もしゃばしゃばで積もらない。電車に乗り、彼の最寄り駅で待ち合わせ。コンビニでロング缶のビールを二本

買って、家に向かう。

家に着いて「今日の献立はなに？」と聞くと「ポトフと生姜焼き」との返答。手伝ってといわれたので、ガッテン、じゃがいもを剥く。ポトフのソーセージを用意する彼に「こないだ吉祥寺を歩いていたらシャウエッセンの匂いがしたんだけど、シャウエッセンの匂いってわかる？」と聞いたら「ぜんぜんわかんない」といわれた。わたしもぜんぜんわかんないんだよな。

ごはんを食べながら、ずいぶんいろんな話をした。日本社会での生きづらさ、そしてそれを变えるにも個人のアクションはあまりにも非力なこと。どこまでも答えのない話だけど、彼の希望を捨てないところがとても尊敬できた。わたしが希望を持ってないのは、女であるために生まれたときからあらゆることに落胆しているからか、単にわたしの性格の問題なのか、その両方なのか。借りていた『ドライブ・マイ・カー』の原作が掲載されている『女のいない男たち』借りたというか半ば強引に渡されていた、前回借りた三千元、パレンタインのチョココ、借りていた本のお返しとして赤塚不二夫の自叙伝を渡した。彼は、今度は韓国の小説『アーモンド』を貸してくれた。チョココちゃんと喜んでもらえてよかった。

彼がお風呂に入っているあいだ、薦められた『呪術廻戦』を読んでいた。彼はお風呂

